



■主な内容

- パネルディスカッション 「東日本大震災後」・支援のポジション
- 特集：東日本大震災 会員の活動 その3
 - 第2回「岩泉町どこでもカフェ」に参加して
 - 仮設からはじめるコミュニティづくり
 - 連続研修会「これからの復旧・復興になにができるか」報告
 - 連載：被災地通信（2）—奇遇な出会い—
- 全羅北道建築文化祭訪問レポート
- 災害復興見守りチームの報告
- 武田満す先生の思い出
- ASWA 組の活動



長洞太鼓の演奏（写真：松川）

第54回海外交流の会 54nd International Lecture

パネルディスカッション 「東日本大震災後」～今、私たちに何ができるか いままでとこれから～
Panel discussion: "After the Tohoku Earthquake"

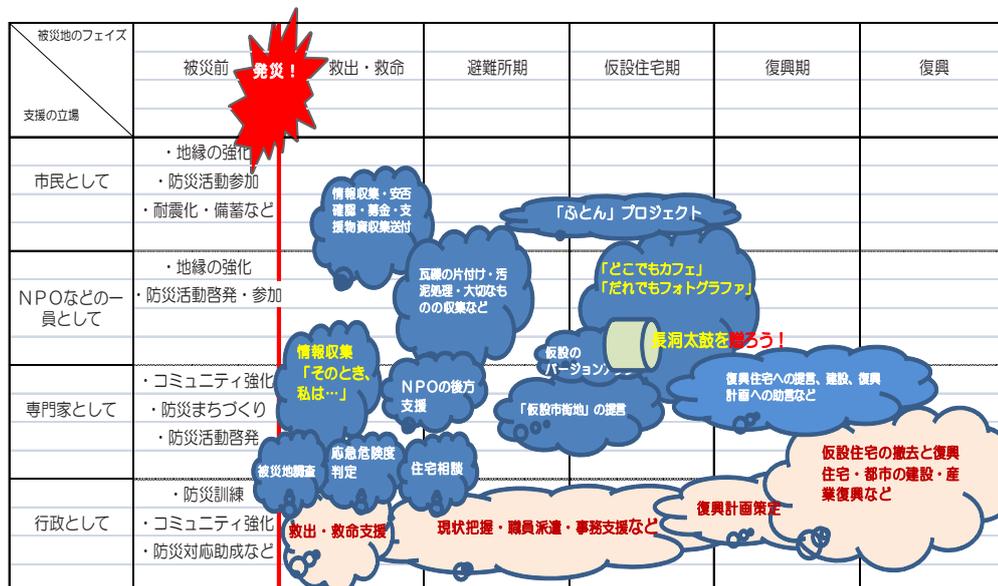
佐藤 由紀子 SATOU Yukiko

2011年11月26日に「東日本大震災後」と題して経済調査会で行われた海外交流の会は、コーディネーターに寺本晰子氏、パネラーに4人のUIFAメンバーを迎えて開催された。

冒頭、宮本伸子氏がアンケートをもとに、UIFAメンバーの震災時の行動や感じ方を報告。多くの人の意識や考え方が震災を機に変化したと分析した。岩手県大槌町や宮城県亘理町に赴いて支援活動を行った北本美江子氏からは、現地組織のノウハウやネットワークの力量差が復興速度に影響を与える事や、時間経過とともに変わる人々の心理状況など、現地に足を運んだ人ならではの話を伺った。続く黒石いずみ氏は大学生と山形県新庄市で行った活動を披露した。「建築や地域計画は住民の為になされるのであり、その理解の上になつべきだ」という今和次郎の言葉を引用し、復興に向けて若い世代が現場に関わる必要性や住民の視点を尊重した移転計画を訴えた。岩手県岩泉町の小本（おもと）仮設住宅地で行った「どこでもカフェ」について、稲

垣弘子氏は岩泉市の概要や被災状況を説明しつつ、写真とエピソードで2回にわたる活動を余す所なく語り来場者を惹き込んだ。法末（ほつすえ）集落支援活動は宮本氏によってコンパクトに報告されたが、2005年から続けてきた活動は継続的な支援の重要性を聴衆に強く印象づけた。

会場からもメンバーの支援活動が次々と報告された。これらを、コメンテーターの松川淳子氏が「支援の時空間マトリックス」にまとめ分析（下記参照）。UIFAメンバーが個人や市民の立場で様々な支援を展開する一方で、専門家の立場で関わる機会が少ない事を指摘した。ただ、資金源の確保や、日頃の研鑽、他団体との連携などに努めることにより専門家として関与する余地はあるとして、被災地の時間的経過による、ニーズ変化に対応した継続的な支援の重要性を説いた。各々が震災後の8ヶ月を振り返り、これからを考えた一日だった。最後に参加者の中に複数の女子高校生がいた事を特筆すべき事柄として付記しておきたい。



支援の時空間マトリックスの試み（UIFA JAPONメンバーの関わり）（作成：松川）

支援のポジション
Position of support
松川淳子 MATSUKAWA Junko

今後の活動の方向を議論するために会員が行ってきた活動を、時間軸と支援の立場の軸から表を作ってそこに落としてみた。避難所期から仮設住宅期にかけては、専門家としての立場より、市民サイドの支援活動が多い。防災計画、復興計画、復興支援に専門家として女性の登用が少ないことは内閣府でも指摘しているが、その片鱗が見えるのかもしれない。避難所期以降の時間軸上にもっと参画していく必要があるように思えた。

東日本大震災から間もなく1年が経つが、あの時の揺れを今も鮮明に思い出す。これからも、そしてこれからだからこそ、私達に出来ることがあるにちがいない。会員の記事はそれを示唆しているように思う。(薄井温子 USUI Haruko)

第2回「岩泉町どこでもカフェ」に参加して・・・ひとりごと
UIFA JAPON Project : Dokodemo Café in Iwaizumi Part II
上田壽子 UEDA Hisako

11月5日(土)暗くなってから仮設住宅到着。明日の仕度を整える。

6日(日)朝、岩泉の町並みを見つ、名物の栗羊羹を購入。飾り物の花や枯葉を道端でゲット。さあ開店の準備。集会室内はお抹茶、コーヒー、紅茶の接待。私は外でおでんの番と衣類の店番。おでんの大根は仙台の岩井さんが畑で引いてくださったもの。おいしい!こんにゃくは遠く新潟法末から宮田氏が持参。大きなおなべ4杯分はあろうかというおでんの量。すごい!こんにゃく用のゆず味噌がまたおいしい!

衣類は午前と午後に分けて出そうか、一世帯3点以内とか・・・いろいろ案は出たものの、開店前に男性が「ちょうどいい。こんなのがほしかった」とほくほくして仮設住宅へ。そこへまた奥さんが主人がいいのもらってきたからと2点ほどゲット。ここで「ひとつにしてくださいまだ開店してないんです」なんて言えようか・・・。そうこうするうち開店時間。さあもう皆が手を出す。でも秩序ある行動。だれひとり独り占めなんてしない。「家もねえ、服もねえ、船も流された・・・」なんて言葉を聴いたらどうぞ持ってってください。午前中だけでほとんどの衣類がなくなってしまった。お昼からどうしよう・・・ないものは仕方ない。おでんは鍋いっぱいあり。ちょっと雨模様の寒い日曜日、あったかいおでんの味は最高!お鍋を持ってきてもらって2人分うちは3人分と持って帰られる。ちょうどNHKののど自慢見ながらお昼ご飯ですと。いいなあ、お昼おでんでテレビ見て。仮設住宅でさえなかったら。壁はちょっとだけ断熱材が施工されているものの寒いやろうなあ・・・。

小雨の中無事終了。私は「外回り」。中で行われたカフェの内容はほとんどわからず。でもなかなか出てこない人達に、お話が弾んでるんやなあ・・・と感心。さて撤収、の掛け声とともにすばやく片付け。暗くなった国道を盛岡目指して走った。駆け巡っただけの岩泉。でも行かないより行った方がいい。見ないより見たほうがいい。これから自分に何が出来るのか、何かできたらいいな。強烈に残っているじかに聞く話。いろんな人の話を聞きたい、尋ねて見たい。忘れないでいたい。

どこでもカフェ外部編



(写真:平野)

“仮設からはじめるコミュニティづくり”
Community of Makeshift Houses

渡邊 喜代美 WATANABE Kiyomi

南三陸町はリアスの美海。海は巨大災害があったことを忘れさせる。海と山と向き合い続けた歴史がある。それを超えてTUNAMIは命も町も歴史も飲み込んだ。「雪の降る中を家族で逃げる 暗い森もいのちを守る 灯の中と思う」友人工藤さんの五行歌が瞬間を伝える

今、人々は果敢に取り組む

10ヶ月たった。人々は果敢に前を向く。「福興市」は1月29日で9回目。歌津地区に仮設店舗が開き、志津川地区は2月開店。「海のおかげの豊かさ、海が教えてくれた共生の心を忘れず、ふたたび海と向き合う」と漁師たちは秋から冬、流された船を引き戻し修理し、漁場を整えワカメやホタテの種を植え付けた。ワカメはこの2月に収穫となる。漁師の佐々木さんは都市から帰ってきた息子と早朝1時から海にでる。菊栽培の佐藤さんは休耕地活用で再生準備中。この佐藤さんは地区長として地区をまとめて避難誘導し、仮設入居も地区をまとめて入居に漕ぎつけた稀有な人。彼はコミュニティの離散は命取りになると承知している。

暮らしの原則<衣食住+医職住>足りず

仮設住宅58箇所、2200戸。外断熱工事中。4人家族はまともに布団がしけない。町は300人近い「支援員」を配置して「これ以上尊い命を失いたくない」と巡回する。交流の場となる集会所もない仮設団地は12月町議会でやっと設置決定。建設は年度内か。今も寒いテントのたまり場で職を失った高齢者たちは集う。配慮のない住環境は人々を苦しめるが、全仮設に自治会もでき、行政の提案に対して主体的に考えようと協議会が立ち上がった地区もある。仮設の病院、図書館、バス移動図書館もできた。ほんの少し暮らしが見えてきた。重要課題は職と住である。心である。

さて!“私たちにできることは何か<まず聞こう>”

NPOCHCのコミュニティ支援は、人と人のいい具合な出会いがこれからのまちづくり住まいづくりの基になることを祈願して「仮設に“はな”を咲かせよう」プロジェクトを立ち上げた。“暮らしの場を自分たちで考えよう”と語り合う。「支援を受けるばかりでなく自分たちを取り戻したい」と底力ある女性たちは仕事をしたいという。男女隔てなく仕事はプライドである。アイディアとして持参した刺し子の作品が女性たちの気持ちに繋がった。ささやかに「コモン・テ・シゴト」事始。しかし針一本のこらずだ。はり、いと、布、ミシン、はさみ、定規、カットマットなどなど集めて持ちこんだ。モデルで始めた集会所に集まったの「コモン・テ・シゴト」は会話を生み、時にコモン・ミールもして暮らしの実力を発揮し始めている。作品もできた。仮設から始めるコミュニティの小さな一歩。先は長いが人と人の出会いはたいしたものである。創再生まちづくりに向けて少しづつ、少しづつ声が聞こえる。

連続研修会「これからの復旧・復興になにができるか」報告
災害復興見守りチーム
Continuing Lectures on Recovery and Reconstruction
UIFA Japan Disaster Support Team

第7回 2011年10月22日(土) 溝口薫氏(中央区総務部総務課女性施策推進係長):「石巻市役所の仮設住宅支援」

震災5ヶ月後の石巻現場での状況を具体的にお話してくださいました。参加者は13人。石巻市役所は震災後、臨時職員を250人雇用し、対応にあたっていた。それでも職員の人数は足りなかった。役所同士の防災協定というものがあり、災害が起きた時に物資を融通したり、職員を派遣したりする。中央区は3市と協定を結んでいるが、溝口氏は今回、東京23区からの派遣という形で8月17日から21日の5日間(1週間)石巻市役所の仮設住宅入居支援を行った。

女性職員は少なかった。窓口にいると話しやすいらしく、気軽に声をかけてくれた。「女性がいると和む」などと、喜んでいただいているようだった。実際、窓口はクレーム処理が多かった。震災から5ヶ月が過ぎ、皆、切羽詰まった状況で混乱していた。被災地の住人もいらだっていた。

主な支援の内容は「仮設住宅の当選のお知らせ」など。ほとんどの住人の携帯電話の番号が登録されていて、そこに連絡する。便利である。

当選のお知らせから実際に入居するかどうかの返事は2~3日。新潟の中越地震のときは集落ごとなどの単位で仮設住宅に入っているが、今回はコミュニティがどうのこうのと言っていない状況だった。(森田美紀)

第8回 2011年12月10日(土) 田尾陽一氏:自然と生活の再生に集う「ふくしま再生の会」活動状況

連続研修会で初めて原発事故がとりあげられた。

物理専攻だった田尾氏は事故に衝撃を受け(責任も感じたかもしれない)、できることを探るため多分野の専門家と県内を回るうち、6月6日に飯舘村(6月20日には全村避難)で菅野宗夫氏と出会う。“福島の問題は世界の問題”と語る宗夫氏の自宅を拠点に「ふくしま再生の会」をただちに立ち上げ、ここを自然・生活・産業の再生を試みる実証の場とした。“まてい”(手間ひま惜みせず、丁寧に、つつましく、などの意)を合言葉に村づくりを進めてきた飯舘村の評判は知らなかったが、なにより、村は美しかったという。

会の活動は、まず、汚染の実態把握(今後を見通すため、全地区の詳細な時系列変化をあらゆる方法で捉える)。植物による土壌除染とエネルギー植物生産実験。田畑除染(表土剥ぎ取り、天地返しなど、いくつもの方法実験中)。山林除染(針葉樹と広葉樹で異なる)や水系除染。住まい除染(効果は出にくい)。光回線・インターネット環境の整備による情報ネットワークづくり(現地からの発信と協働に向け)。被災地の医療・看護・介護・生活支援サービスを支える連携システムづくり。これらの実証実験を村の外へも広げていき、ボランティアを組織し、事業化を進め、自然と生活の再生をめざす。(詳しくは会のホームページ参照)

嘆かわしい人災による深刻な事態の中、住民と専門家が協働して知恵と能力を出しあい、人類にとって初めてのことを“なんでもやってみる”活動に、希望を持たないわけにいかない。(在塚礼子)

連載:被災地通信(2)—奇遇な出会い—
Report from the Disaster: Updates in Sendai 'Pt' II
岩井 紘子 IWAI Hiroko

かの震災から約1ヵ月後の4月16日(土)、被災者建築相談担当として南三陸町歌津の名足保育園避難所に小雨降る中、一人心細い思いで午後2.00会場に入った。そこは命からがらあの大津波から逃げ延びた被災者家族達が、あの恐怖体験を胸に秘め寄り添いジッと堪え、俄か集荷された様々な支援物資に兎にも角にもあり付け、何とか急場凌ぎを余儀なくされておる騒然とした避難所であった。

「おら、ウジも流され、住むドゴロもカセグドゴロもカネもネグなった、ナヌば相談スロとユウのだ」と食ってかかって来た方がいた。ショックだった。現実はこのなのだ!

そしてこれが私として出来る被災者への取り組み方の原点になった。

12月18日、UIFAとして陸前高田広田半島被災地長洞太鼓贈呈に参加させて頂いた。

当日午前の部として奇しくも松川会長関連の仮設市街地研究会メンバーの隣接地南三陸町歌津・馬場中山地区の自力復興にとりくむ漁村集落活動支援の打ち合わせに同行出来る事になり、相談会時以来の歌津訪問となった。が、何とそこは11月6日NHKドキュメンタリー放映された「孤立集落、どっこい生きる」の現地であった。しかも感動して見ておったあの部落の避難所物語、TVで見ておった時は全く気がつかなかったのだが、ドキュメンタリーの主役であるリーダー阿部倉善(通称くらさん)さんが何と4月16日の本人だったのだ。あの当時は兎にも角何も考えられなガッタガラナ〜と語られたのでした。

あの想像だにできなかった180度狂わされたそれまでの人生、何を目標に、何を糧にすべく生きて行くべきか全くの闇だったのに、今は確実に、兎にも角元の生活に戻りたいの一心で、部落民を奮い立たせ、共に生きようと国に、支援者に声を大にして復旧を試みている阿部さん達の姿にふれ、スゴイ、良く頑張っていましたね、必ず新しい部落生活空間が生まれるよと心からのエールを送ったものです。

と共に、真の復旧復興という兆しをシカと垣間見させて頂き、それまで何もない何も無くなってしまった被災地を見させられる度、

日本国の無能さを嘆いてばかり居りましたのを完全に覆され、大丈夫だ、もう大丈夫と確信出来、実り多い今回のツアーになりました。

(仙台市若林区在住)



地図を片手に語る阿部さん

長洞太鼓 Nagahora Taiko Drums

陸前高田に伝わる由緒ある長洞太鼓。津波で多くが流されたこと聞き、UIFA JAPON 義援金の一部を使って贈呈することを理事会で決定。中国に注文していたものが3ヵ月をかけて完成し、送られて来ました。早く届けたいと有志が現地に出かけ、2011年12月18日に贈呈式を行いました。太鼓組による記念の演奏の様子を、動画で見ることも、聴くことができます。ぜひUIFA JAPON ホームページをご覧ください。中央の太鼓が新しい長洞太鼓です。

(在塚礼子)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

URL: http://uifa-japon.com

発行 2012年2月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com

Experience Report : 全羅北道建築文化祭訪問レポート

三上 紀子 MIKAMI Noriko

10月31日～11月4日、韓国全羅北道全州市で建築文化祭(12th Jeonbuk Cultural Festival)が開催され、UIFA JAPONからも急ぎよ作品パネルを出展することとなり、板東、三戸、三上の3会員が各々住宅作品のパネルを提出、僭越ながら会場の視察ならびに関係者との交流を目的とし訪韓させていただきました。

ソウルからKTXで約2時間。会場の全羅北道庁舎の1階ロビーには韓国国内の建築作品を始め、学生のドローイングや模型等約50点のパネルが展示され、3階会議室では建築土木に関する研究論文発表会等が行われていました。UIFAからのパネルは、ドイツ2作品、中国1作品、KIFA5作品、そして日本3作品で、<Green Environment>と名付けられたコーナーに展示されていました。日本からの3作品は、自然光の回避・自然通風を取り込んだ『VOID space brews CORE space』(板東)、作業面に合わせて起居様式より床レベルを調整した『つくえの住宅』(三戸)、日本の伝統的な空間特性と現代の生活様式を融合させた『しつらいの家』(三上)で、いずれも環境に配慮した小住宅です。展覧会場視察の後、ソウルに戻り、KIFA事務局を訪問しました。一昨年のソウル大会、昨年2月のKIFAメンバーの来日、そして続く9月のUIA東京大会での再会と、日韓交流が続いていることを喜び合い、今後も密接な交流を続けていきたいと互いに確認しました。

今回の訪韓は急なスケジュールな上、何の詳細情報もないまま韓訪準備に入りましたが、幸いにも最終的には情報も十分入手でき、現地では多くの人々との交流に恵まれた有意義な訪韓となりました。実際に現地に行って、会い、見て、話しをすることの大切さをあらためて感じた次第です。最後になりましたが、貴重な機会を下さいました松川会長はじめ皆様に深く感謝申し上げます。



UIFA JAPONのパネルの前で、KIFAのPak教授と。

■ 災害復興見守りチームの活動 UIFA Japon Disaster Support Team

— 吉例の初釜そして賽の神 — 田陽裕美 TAJIMA Yumi

昨日の疲れも大きなお風呂で流し、爆睡。美味しい手作りの朝食も上膳据膳で頂き、予定通りそれぞれの持場の準備に取り掛かった。お客様を迎える玄関ホールには、テーブルの上にお花を入れた黒塗りの花器。お茶席として使用する食堂は、助っ人の男性達により手際良くテーブルやイスが出される。洗面所は水屋、玄関前の和室は控えの間として設営。お茶会の席は、教壇が置床に変身、掛軸の前にはお正月に相応しい華やかな飾りが置かれ、左右にはお香立てと黒塗りの花器に程好く花が。年を重ねる毎に工夫され、素晴らしいお茶席のしつらえが出来た。賽の神(どんど焼き)の終了を待って始まったお茶会は、来てくださった人は例年になく少なかったが、集落で暮らしている二人のお子さんが、お母さんと一緒に来てくれたのは嬉しく思った。

■ 役員会報告

第7回11月22日(2011年)NL89号が11/25、90号が2/25発行、11/26実施の第54回海外交流の会確認、韓国全羅北道建築文化祭へ参加し、三戸、坂東、三上3氏が出席、三上会員が訪韓、岩泉どこでもカフェ10/10と11/6実施、災害復興見守りT震災連続研修開催、法末住宅カルテ贈呈、IAWAアドバイザー会議に松川会長が参加、ASWA組リーフレットの配布、UIA千人茶会、災害復興支援太鼓發送など報告及び協議。

第8回12月15日(2011年)NL89号発行、90号編集、11/26第54回海外交流の会実施、2/18実施第55回海外交流の会検討、震災復興見守りT連続研修会開催(第8回)、誰でもフォトグラフィアのスケジュール、ASWA組の活動、おもてなしT発足、パオニア展会場など報告及び協議

■ 武田満す先生の思い出

Remembering Ms.Masu Takeda

山田 規矩子 YAMADA Kikuko



昨年7月18日に逝去された武田満す先生の思い出といえば、UIFA イラン大会につぎ。1976年10月、イランのカスピ海南岸の街ラムザールで開催された大会への日本からの参加者は、ただ一人の男性、林昌二氏を含め13名。武田先生はその中の最年長ということもあり、自然に皆で先生を団長さん格として仰いでいた。

当時、イランはファーレビ国王の時代だった。王妃出席の開会式には正装をして出席するようにとのことで、日本人の何人かは着物で出席した。その時、武田先生の部屋は、さながら“武田着付け教室”だったようだ。

フランスで建築を学んだという美しい王妃のフランス語によるスピーチで式典は始まった。会議のテーマは、“The Crisis of Architectural Identity”。アメリカやヨーロッパからの講演者は年配の人が多く、女性の建築家達の歴史の厚みを感じさせ、イランの講演者達は若く澆漓としていた。会議後のバスツアーはラムザールからハマダン、イスファハン、ペルセポリス等のイラン古都を順々に訪ね、“薔薇と葡萄酒と詩人の街”シラーズが最後の訪問地だった。

会議とツアーを通して、武田先生は朗らかな笑い声や明るい話し方また英語の説明を日本語で繰り返して下さる気くばりで、いつも会話の輪の中心におられた。日本人メンバーは、そんな武田先生を頼りにしながらイラン滞り期間を過ごしたのだった。

武田先生の御冥福をお祈りいたします。

■ ASWA 組の活動 ASWA Team Activities

中野 晶子 NAKANO Akiko

六角コネクション：六角形のパネルを着彩しカードリングで繋ぐARTな昇降口が六角橋中学校に出現しました。中2生290人が4チームに分かれ二時間ずつの連続授業で二日間取り組みました。(1月16日、23日)シナ合板3mmをおおよそ22.5cm角に内接する六角形パネルを水性ウッドステインで2色に塗り分け、20色を使っ



て計570枚の壁面構成を生徒がデザインし楽しい昇降口ができました。昼食のパン屋さんコーナー、自販機のコーナーなどのにぎやかなれん飾りが、暗かったこの空間を気分一新しました。読売新聞に掲載されました。

いっと6けん：NHKの番組に昨年の11月24日、青葉台小学校の「杜と海のおりゃんせ」が3分間紹介されました。

第8回1月16日(2012年)NL90号の進捗、2/18実施の第55回海外交流の会確認、総会の講師検討、おもてなしT実施法末さいの神と初釜茶会1/14、15終了、ASWA組の活動、2/7～3/4パオニア展巡回展をあざみ野で実施、HP部会の活動、12/17、18日義捐金の活用、会費未納者対応など報告及び協議。その他会員の活動報告。

■ 編集後記

屋根上の巨大な雪帽子、降ろす手を案じながら、法末を後に(井出)それでも、梅が咲き始めましたね(在塚)お正月の奈良は最高でした(飯田)葉の落ちた枝先膨らむリンゴの芽(須永)“支援のポジション”という大事な提言あり。UIFA JAPONの底力を発揮しよう!(渡邊)今年こそ雛人形をださなければ(薄井)